特273
495

マルクス著
堺利彦譯

利潤の出處

原名『價値と價格と利潤』

無産社パンフレット（4）

（價貳拾錢）

始

特273
495

目次

(一) 價値と勞働……一
(二) 勞働力……一七
(三) 剩餘價値の生産……二三
(四) 勞働の價値……二七
(五) 利潤の得られる道……三〇
(六) 剩餘價値の分割……三二
(七) 利潤と賃金と價格との關係……三六
(八) 賃金値上運動……四〇
(九) 資本と勞働の闘爭……五三

はしがき

資本家の利潤は勞働者の勞働力から出る。それより外に出所はない。勞働者は二本の腕より外に何物をも持つて居らぬ。そこで止むなく勞働力を資本家に賣る。資本家は勞働力を買つてそれを働らかせ、そしてそこから利潤を搾り取る。つまり資本家は勞働者を搾り取るより外に利潤を得る道はない。

勞働者が資本家に反抗して、幾ら賃金を上げさせたり、勞働時間を短くさせたりしても、結局ヤット命をつなぐだけの生活しか出來ない。資本制度の續く限りこの運命はどうしても免かれられない。そこで勞働運動の究極の目的は、賃金制度（卽ち勞働者が賃金で資本家に雇はれて働らく制度、卽ち資本家が勞働者を搾り、勞働者が資本家に搾られる制度）を全廢する事に歸着する。それより外に勞働者解放の道はない。

凡そこういふ主意の事を、經濟學上から一寸一分のスキもなく、而も極めて通俗に分りやすく說いたのが此の本である。

利潤の出處

——（原名『價値と價格と利潤』）——

マルクス著
堺利彥譯

大正
15. 3. 13
内交

(一) 價値と勞働

さて諸君、我々のさゝに提出する第一の問題は、『商品の價値とは何か』『商品の價値は如何して決定されるか』といふ事である。

一見した所、商品の價値は全く相對的のものであつて、一つの商品を他の總ての商品と關係させて考へなければ、決定する事が出來ないように思はれる。實際、我々が或る商品の價値、（卽ち

交換價値）について語る時には、其の商品が他の總ての商品と交換される、其の比例的分量を意味してゐる。けれども、そうすると、そこに問題が起つて來る。商品が相互に交換される、其の比例は如何にして決定されるのか。

實際の經驗上、我々は其の比例が無限に變化する事を知つてゐる。假りに或る一個の商品、例へば小麥を取つて見ると、一石の小麥は殆んど無數の違つた比例で、他の種々の商品と交換されてゐる。けれども、小麥の價値が絹なり、金なり、或は他の何等の商品で現はされた所で、其の價値はいつも同一である筈なのだから、價値その者は其の種々の交換率とは別な、それから獨立した、何物かでなければならぬ。從つて此の種々の交換率を、それと大いに違つた形式で言ひ現はす事が出來なければならぬ。

のみならず、一石の小麥が或る比例で鐵と交換される、即ち一石の小麥の價値が或る分量の鐵で言ひ現はされるとした時、それは小麥の價値と、その小麥に相當する鐵の價値とが、小麥でも鐵でもない、或る第三者に等しいといふ事である。この場合、小麥と鐵とは同一の分量を二つの違つた形式で現はしたわけである。だから此の兩者は、小麥でも鐵でも、別々に獨立して、その第三者に還元されなければならぬ。その第三者は即ち兩者に共通な尺度である。

此の點を說明する爲に、極く簡單な一例を幾何學から取つて見る。種々雜多な三角形の面積を比較する時、又は三角形と長方形（もしくば他の種々なる直線形）とを比較する時我々はどういふ風にしてゐるか。我々は如何なる三角形の面積をも、其の外形とは全く違つた表現の仕方に還元してしまふ。即ち三角形の面積は、その底邊に高さを乘じた積の半分に等しいといふ性質上、總ての三角形の面積を其の數字に還元する。そして有らゆる三角形の種々なる價値を比較する事が出來る。長方形や他の直線形も、總て幾つかの三角形に分割され得るのだから、矢張り同じ方法で比較する事が出來る。

商品の價値についても、右と同じ遣方が出來る筈である。即ち我々は總ての商品を、それに共通な表現法に還元して、そして各商品が其の共通の尺度の幾許を含んでゐるかといふ、其の一だけで各商品を區別する事が出來る筈である。

一體、商品の交換價値は單に其の物品の社會的作用であつて、其の自然的性質とは何等關係のないものであるから、我々は先づ問はねばならぬ。何が總ての商品に共通な社會的實質であるか。それは『勞働』である。商品を生産するには、必ず何程かの勞働がそれに加へられ（もしくは費され）ねばならぬ。そして其の勞働は只の勞働でなく、社會的勞働である。人が直接自分用の爲に、即ち自分で消費する爲に、貨物を生産すれば、それは生産物ではあるけれども、商品ではない。そういふ人は自給自足の生産者として、社會と何の關係もない。然るに商品を生産する場合には、或る社會的の慾求を滿たす貨物を生産すると云ふばかりでなく、其人の勞動その者が、社會の費す勞働總額の一部分とならねばならぬ。即ち其の一勞働が社會内の分業に從屬せねばならぬ。從つて其の勞働は、他の諸分業がなくては成り立たぬものであり、又こちらから云へば、其の勞働が他の諸分業を補充するものである。

そこで、我々が商品を價値として考へる時には、單に社會的勞働の實體化されたもの、固着されたもの、結晶されたものといふ見地からばかり考へるのである。此の考へ方からすれば、諸商品の差異は只勞働の分量を代表する事の多少に在る。例へば絹のハンケチには、煉瓦石により も、餘計な分量の勞働が費されてゐると云ふようなわけである。然し其の勞働の分量はどうして計るか。それは勞働の續く時間で計る。即ち時、日などで勞働を計る。勿論、この計り方をするには、各種の勞働を其の單位たる平均勞働（或は單一勞働）に還元するのである。

斯くて我々は次の結論に達する。商品が價値を持つのは、社會的勞働の結晶だからである。商品の價値（もしくは其の相對的價値）の大いさは、其の中に含まれてゐる右の社會的物實の多少に依るのである。即ち商品の生産に必要な勞働量の多少に依るのである。故に諸商品の相對的價値は、それぞれの商品に施された、實現された、固着された勞働量に依つて決定される。同一の勞働時間で生産され得る所の諸商品のそれぞれの數量は、同一價値である。又、一商品の價値と他商品の價値との釣合は、一方に固着された勞働量と他方に固着された勞働量との釣合である。

思ふに諸君は、こゝで斯ういふ質問を出すだらう。然らば商品の價値を勞働賃金で決定するのさ、生産に必要な勞働量で決定するのとの間に、そんなに大きな（或は何等かの）差異が本當にあ

るのかと。然し諸君は先づ知らねばならぬ。勞働に對する報酬と、勞働の分量とは、全く別物である。例へば、小麥の一石と金の四匁とに、同じ勞働量が固着されてゐると假定せよ。然らば一石の小麥と四匁の金とは等價である。兩方とも平均勞働の同じ分量の結晶であり、又兩方の中に固着されてゐる勞働の、それ〴〵の日數(もしくば時間數)の結晶である。斯樣にして金と小麥との相對的價値を決定する時、我々は聊かでも、農夫と坑夫との勞働賃金の事を考へるか。決してそんな事はない。我々は、彼等の勞働に對して如何なる支拂が行はれたか、或は賃金勞働が雇用されたか否かをすら、全く不問に附する。そして賃金勞働が雇用されたとすれば、其の賃金は隨分不同であつただらう。一石の小麥に勞働を體現させた勞働者は四斗しか貰はないのに、金坑に使用された勞働者は二匁の金を貰ふといふ事もあるだらう。又、賃金は同じとしても、其の賃金は彼等が生産した商品の價値に比べると、種々樣々の差異を生ずるだらう。彼等の賃金は一石の小麥、若しくば四匁の金の、二分の一、三分の一、四分の一、五分の一、或は其の他あらゆる何分の一かであり得るだらう。勿論、彼等の賃金は彼等の生産した商品の價値以上にはなり得ない

が、有らゆる程度に於いて其の以下ではあり得る。彼等の賃金は生産物の價値に依つて制限されるが、生産物の價値が賃金に依つて制限される事はない。殊に小麥と金との相對的價値は、使用された勞働の價値(即ち賃金)と何等の關係なしに定められる。故に、商品の價値をそれに固着された勞働量に依つて決定するといふ事は、商品の價値を勞働の價値(若しくば賃金)で決定するといふ、無意義な循環論法とは全く別物である。但し此の點については猶ほ後に委しく說く。

所で、商品の交換價値を計算するには、最後に使用された勞働量の外、その原料に施された以前の勞働量と、最後の勞働の補助になつた器具や機械や建物に費された勞働量とを加算せねばならぬ。例へば若干の綿糸の價値は、紡績の過程中に綿花に加へられた勞働量と、綿花その物に體現されてゐる以前の勞働量と、石炭、石油、その他の補助物に體現されてゐる勞働量と、蒸氣汽鑵や錘や工場の建物などに固着された勞働量との結晶である。正常の意味に於ける生産機關(生産手段)、即ち器具、機械、建物の如きは、生産を繰返して行く間、引續いて幾度も幾度も使用される。若しそれらの物が原料と同じように、一時に消費されるのであつたら、其の全價値が一

時に商品の上に移る筈である。けれども假りに錘について云へば、錘は永い間に段々に消費されるのだから、其の持續する平均時日を基礎として、或る期間(例へば一日間)に於ける平均の消耗分を計算する事が出來る。斯樣にして我々は、錘の價値の何程が、日日紡ぎだされる綿糸の上に移されるかを計算する事が出來る。從つて、綿糸の一ポンドに體現された勞働總量の中、何程が以前に錘の上に體現された勞働量であるかを計算する事が出來る。

そこで斯う考へられるかも知れない。商品の價値がそれの生産に費された勞働量に依つて決定されるとすれば、勞働者が怠惰であり、若しくば不器用であればあるほど、(商品の仕上げまでに要する時間が多く掛るのだから)其の商品の價値が多くなる筈だと。然しそれは大變な間違ひだ。諸君は、私が前に『社會的勞働』といふ言葉を使つた事を記憶して居られるだらう。此『社會的』といふ形容語の中には多くの意味が含まれてゐる。商品の價値が、其の商品に費された(或は結晶された)勞働量に依つて決定されると云ふ時には、或る社會狀態の下に於いて、即ち社會的に平均した或る生産條件の下に於いて、勞働の平均强度と平均熟練とに依つて、其の生産に必

要とされる勞働量を意味してゐる。イギリスで、機械バタが手織バタと競爭して行はれだした時、若干の綿糸を一ヤルの綿布に變ずる爲には、以前の半分の勞働時間しか入らなくなつた、哀れな手織バタの職工は、從來の九時間か十時間かの勞働時間の代りに、今は毎日十七八時間も働く事になつた。けれども、彼の勞働の二十時間分の生産物は、今では僅かに社會的勞働の十時間分(即ち若干の綿糸を織物に變ずる爲に、社會的に必要な勞働の十時間分)を代表するに過ぎなかつた。だから彼の二十時間分の生産物は、從前の十時間分の生産物だけの價値しかなかつた。

そこで、商品に體現された社會的必要勞働の分量が、其の商品の交換價値を定めるものとすれば、生産に要せられる勞働量の增減は必ず商品の價値を增減させる筈である。

從つて、又、諸商品の生産に必要な、それ〴〵の勞働量が不變であれば、その諸商品の相對價値も亦不變な筈である。所が實際はそうでない。商品の生産に必要な勞働量は、勞働の生産力の變化と共に絶えず變化してゐる。勞働の生産力が大なれば大なるだけ、一定の勞働時間内に仕上げられる生産物が多くなり、生産力が小なれば小なるだけ、同時間内に仕上げられる生産物が少

くなる。例へば、人口の增加の爲、餘り肥沃でない土地を耕作する事が必要になつたとすれば、從來と同量の生產物を得る爲に、從來よりも多量の勞働を費さねばならぬ事になり、從つて農產物の價値が高まる事になる。之に反し、近世の生產手段に依つて、一人の紡績工が、昔しの絲挽車の時に比べて何千倍かの絲を作りだすとすれば、今の絲は昔しのに比べて明らかに何千倍も少い紡績勞働を吸收してゐるのだから、紡績に依つて綿花に加へられた價値は昔よりも何千倍か少い筈である。從つて綿絲の價値は下落する事になる。

勞働の生產力は、各人の本質的精力の相違と、習得した勞働技能の相違との外、主として左の二點に依つて決せられる。

第一。勞働の自然的條件。卽ち土地、鑛山、その他の肥沃の程度。

第二。社會的勞働力の進步。卽ち大規模の生產、資本の集中および勞働の結合、分業の發達、機械の使用、勞働方法の改良、化學力その他の自然力の應用、交通機關に依る時間空間の短縮、その外、有らゆる自然力を驅つて勞働の用を爲さしめ、又勞働の社會的(卽ち協力的)性質を發達せしめる所の一切の設備。

斯くて生產力が大なれば大なるだけ、一定量の生產物に加へられる勞働は減少する。從つて生產物の價値が減少する。生產力が小なれば小なるだけ、同量の生產物に加へられる勞働は增大する。從つて其の價値も增大する。故に次の一般法則が生ずる。

商品の價値は其の生產に使用された勞働の時間に正比例し、その勞働の生產力に反比例する。

以上は價値の事だけについて語つたのだが、これから價格(價値の特殊形態たる價格)の事について數言を附加せねばならぬ。

價格は、それ自體として見れば、價値の貨幣的表現(價値を貨幣で表現したもの)に過ぎない。例へば、イギリスの商品の價値は金の價格で表現されるが、歐洲大陸の商品は主として銀の價格で表現される。金若しくば銀の價値は、有らゆる他の商品の價値と同じく、それを得る爲に必要な勞働量に依つて定められる。諸君試みに、諸君の國の若干の勞働量が結晶されてゐる所の、國產物の或る分量を、金銀產出國の若干の勞働量が結晶されてゐる所の、其の國產物(卽ち金銀)と

交換して見たまへ。諸君は斯樣にして、即ち實は物々交換に依つて、總ての商品の價値（即ち諸商品に附與された、それ〴〵の勞働量）を金銀で表現する事を學ぶのである。そこで價値の貨幣的表現といふ事（即ち價値を價格へ轉換する事）を、もすこし精密に考へて見ると、それは總ての商品の價値に對して、獨立の、そして同質の、形體を與へる手順である。即ち總ての商品の價値を、同じ社會的勞働の諸分量として表現する手順である。それで此の價格なる者は、單に價値の貨幣的表現である限りに於いては、或は『自然價格』と呼ばれ、或は『必要價格』と呼ばれてゐる。

然らば價値と市場價格（實際の物價）との關係、即ち自然價格と市場價格との關係は如何。諸君の知られる通り、同種類の諸商品は、如何にそれ〴〵の生產條件が違つてゐようとも、皆な同じ市場價格を持つてゐる。市場價格は、平均の生產條件の下に於いて、或る物品の或る分量を市場に供給する爲に必要なる、社會的勞働の平均量を表現するに過ぎない。即ちそれは、或る種の商品の總額に對して算出されるものであつて、個々の商品に對して算出されるものではない。

こゝまでの所では、商品の市場價格は其の價値と一致してゐる。然るに市場價格は實際上、或時は價値（即ち自然價格）の上に登り、或時は其の下に落ちるが、其の動搖は即ち需要と供給の變動に依るのである。斯樣に、市場價格は絶えず價値から外れてゐるが、アダム・スミスが云つた通り、『自然價格は、諸商品の價格が絶えずそれに引きつけられてゐる所の、中心價格である。種々なる事變の爲に、或時は諸商品の價格が自然價格より餘ほど上に登つてゐる事もあり、又或時は何程かそれ以下に推しさげられる事すらある。然し如何なる障碍物があつて、市場價格が此の休息の中心點に止まる事を妨げようとも、市場價格は常に其の中心點に向かつて傾きつゝある。』

私は今この點を委しく說く事は出來ない。只これだけの事を云つておけばよい。若し供給と需要とが互に平行を保つならば、商品の市場價格はそれの自然價格（即ち、それの生產に要せられる勞働量に依つて決定される所の、それの價値）と一致するであらう。然るに需用と供給とはいつでも互に平行を保つべき傾向を持つてゐる。但し其の平行は、騰貴を下落に依つて償ひ、下落を騰貴に依つて償ふといふ、上下の變動の相殺に依つて生ずるのである。だから諸君が日々の

價格の變動ばかりを見ないで、稍や長期に亘つて市場價格の動きを研究すれば、諸君は必ず、市場價格の種々なる變動騰落（即ち市場價格と價値との開き）が互に相殺され塡補される事を發見するだらう。そして獨占その他の若干の影響を別にすれば、有らゆる商品が平均上、それ〴〵の價値（即ち自然價格）で賣られる事を發見するだらう。然らば市場價格の諸變動が互に相殺される、其の平均期間は如何にと云ふに、それは商品の種類に依つて違ふ。商品の種類に依つて供給を需要に適合させるのに難易の差があるからである。

そこで大體上、そして稍や長期に亘つて考へた所で、有らゆる商品がそれ〴〵の價値で賣られるものとすれば、利潤といふ者が（個々の場合は別として、諸種の事業から生ずる通常不斷の利潤といふ者が）、商品の價格から生ずる（即ち商品を價値以上の價格で賣る事から生ずる）と考へるのは無茶である。此の考への無茶な事は、それを一般に押しひろげて見れば明瞭になる。或人が賣手としては（價値以上の價格で賣るのだから）絶えずもうけてゐるとしても、買手としては（價値以上で買ふのだから）絶えず損をしてゐるわけになる。それなら、世間には賣手でない買手がある、即ち生産者でない消費者があると云ふかも知れぬが、其の說は役に立たない。若しそういふ人々があるとすれば、其の人々が生産者に支拂ふ金は、最初、只で生産者から取つた物でなければならぬ事になる。（何かを賣らないで金を持つてゐるとすれば、それは只で取つたのに相違ない。）假りに或人が來て諸君の金を奪つて、そして其の金で諸君の商品を買つたとしたらどうだ。諸君は幾ら高く其の商品を賣つても、少しもモウケにはならない。そういふ取引は、損を少くする事は出來るかも知れぬが、決して利潤を產みだす助けにはならない。

故に我々は、利潤の本質を說明するに當り、商品は平均して其の眞實の價値で賣られるものだといふ理論、及び利潤は商品を其の價値で賣る（即ち、其の商品の中に實現されてゐる勞働量に比例して賣る）事に依つて得られるものだといふ理論から出發せねばならぬ。若し此の前提の下に利潤を說明し得ないなら、我々は全く利潤を說明し得ないのである。これは如何にもパラドクス（奇說）のようであり、又日常の見聞に反してゐるように思はれる。けれども、地球が太陽のまわりを廻つてゐると云ふのも、水が極めて燃えやすい二つの瓦斯（即ち酸素と水素）から成り立

つてゐると云ふのも、同じくパラドクスではないか。總て事物の紛れやすい外觀ばかりを捉える所の、日常の經驗から判斷する時には、科學上の眞理はいつでもパラドクスである。

（二）勞　働　力

我々は既に大略ながら價値の性質（有らゆる商品の價値の性質）を分析したので、これから『勞働の價値』といふ特殊の價値を考へて見る。そして私はこゝでも又、一見パラドクスに似た言葉を以て諸君を驚かさねばならぬ。

諸君は恐らく皆、諸君が日々賣つてゐるのは『諸君の勞働』だと思つてゐるだらう。從つて『勞働』には『價格』がある。そして又、商品の價格は其の價値の貨幣的表現に外ならないのだから、『勞働の價値』といふ者が當然存在する筈だと思つてゐるだらう。けれども諸君、『勞働の價値』といふような者は、（價値といふ言葉の普通の意味からしては）、決して存在しない。商品に結晶された必要勞働の分量が價値を構成する事は前に云つた通りである。然らば其の價値觀を適用して、例へば十時間の勞働日の價値を極めて見るがいい。其の勞働日の中に何程の勞働が含まれてゐるか。十時間の勞働。そうすると、十時間の勞働日の價値は十時間の勞働に等しいと云ふ事になる。そんな馬鹿々々しい言ひ方があるものではない。けれども、若し我々が一たび、『勞働の價値』といふ言ひ方の、本統の隱れた意味を見いだすならば、我々は此の不合理な、外見上不可能な、價値觀の適用を容易に解釋する事が出來る。それは丁度、我々が天體の眞實の運動を知り得た以上、容易に其の外見上の現象を說明する事が出來るのと同じである。

勞働者が賣るのは『勞働』その者ではなく、『勞働力』である。勞働者は自分の勞働力の一時的使用を資本家に委ねるのである。或る國々の法律で、人が其の勞働力を賣り得る最長期間が規定されてあるのを見れば、右の事が善く分る筈である。若し無期限に勞働力を賣る事が許されるなら、奴隷制度が直ぐに復活する事になる。若しそういふ勞働力の賣却が一生涯に亘るとしたら、其人は全く其の雇主の生涯の奴隷となるわけである。

英國の最も古い經濟學者で、そして最も獨創的な哲學者であるホッブスが、既に直覺的に此の

點に觸れてゐるが、彼れの後繼者等は皆それを見落としてゐる。彼曰く、『人の價値もしくは値打は、總ての他の物の場合と同じく、其の價格（即ち其人の力の使用に對して支拂はれる所のもの）である。』

此の基礎から出發すれば、我々は總ての他の商品の價値と同じように、『勞働の價値』を決定する事が出來る。

けれども、其の前に一つの疑問が起るかも知れない。一體、勞働市場に於いて、土地、機械、原料、及び生活資料（いづれも皆、原始狀態の土地を除いては、勞働の產物であるが）それらの物を持つた買手の一組が一方にあり、そして一方には、勞働力（即ち勞働する腕と頭）の外に何も賣る物を持たない賣手の一組があるといふ、此の不思議な現象はどうして起つたのか。一方の組は利潤を得て金持になる爲に絕えず買つて居り、一方の組は只だ自分等の生活を支へる爲に絕えず賣つて居るといふ現象は、どうして起つたのか。此の問題を研究して行くと、經濟學者の謂ゆる『根原的蓄積』の問題になる。（即ち、資本の蓄積された根源の問題になる。）此の根原的蓄積とは、永い歷史的過程（歷史上の成行）の結果として、勞働する人と、勞働の機關との、昔の結合が崩れた事を意味するに過ぎない。（農民が土地から離され、職人が道具から離され、手工業者が機械や職場から離され、そして、資本が資本家の手に蓄積されたのである。）だから根源的蓄積は寧ろ根源的剝奪と云ふべきである。（即ち勞働する人が勞働の機關を剝奪されたのである。）然し其事をこゝで詳說する暇はない。それで兎にかく、勞働する人と、勞働の機關との分離が一たび確立すれば、其の狀態は永く繼續して絕えず大規模に發展する。そして結局は又、生產方法の新しい根本的革命が起つて、其の狀態を顚覆し、昔しの勞働者と勞働機關との結合を、新形體に於いて回復する事になる。（即ち、資本制度が仆れて社會主義の新組織が起る事になる。）

扨、『勞働力の價値』とは何か。

勞働力の價値は、有らゆる他の商品の價値と同じく、それを生產するに必要な勞働の分量に依つて決定される。人間の勞働力は、人間の生きた個體の中にのみ存する。人間が生長して其の生命を維持する爲には、或る分量の生活資料が消費されねばならぬ。但し、人間も機械と同じよう

に消耗するから、代りの人間が必要になる。だから勞働者は、自らを支へる爲の生活資料の外、幾人かの子供（勞働市場に於いて自分の代りになり、そして勞働者の種を續けて行く子供）を育てあげる爲に、又或る分量の生活資料を必要とする。のみならず、彼れの勞働力を發達させ、或る程度の熟練を得させる爲には、更に何程かの價値が費されねばならぬ。尤も、こゝでは單に平均勞働の事だけ考へればいゝので、それの（即ち普通勞働者の）教育と發達とに要する費用は、今では段々に其の高を減じつゝある。（從つて大した問題とするには足りない。）けれども私は此の機會を捉へて云つて置きたい事がある。性質の異なる種々の勞働力を生産する費用はそれ〴〵違つてゐるから、種々の事業に使用される勞働力の價値も、矢張りそれ〴〵違ふ筈である。故に『賃金の平等』といふ叫びは、間違つた考へに基づくもので、到底實現の出來ない、無理な願ひである。此の要求は（社會主義の）前提だけを受入れて、その結論を避けようとする、淺薄な急進主義が唱へる謬論の産物である。賃金制度の基礎に立つてゐる以上、勞働力の價値は有らゆる他の商品の價値と同じように決定される。そこで種々の勞働力が種々の價値を持つ以上、（即ちそれ〴〵の生産に要する勞働量がそれ〴〵に違ふ以上）、その種々の勞働力が勞働市場に於いて種々の價格を附せられるのは當然である。賃金制度の基礎の上に立つて平等の（若しくば公平の）報酬を要求するのは、奴隷制度の基礎の上に立つて自由を要求するのと同じである。諸君が何を正當と考へ、公平と考へるかは問題外である。問題は只、或る生産制度の下に於いて、何が必然であり、不可避であるかといふ事である。

以上述ぶる所に依れば、『勞働力の價値』は、勞働力を生産し、發達させ、維持し、永續させる爲に要する、生活資料の價値に依つて決定されるといふ事が分る。

（三）剩餘價値の生産

今、一人の勞働者の日日の生活資料の平均額が、それの生産の爲に六時間の平均勞働を要するものと假定せよ。又、六時間の平均勞働は三シリングだけの黃金に實體化されるものと假定せよ。そうすると、其の三シリングが其の勞働者の勞働力の價格、即ち其の價値の貨幣的表現であ

る。そこで彼が毎日六時間づゝ働くならば、彼は毎日、自分の生活資料の平均額を買ひ得るだけの(即ち、勞働者としての自分を維持するだけの)價値を生産するわけである。

けれども彼は賃金勞働者である。彼は自分の勞働力を資本家に賣らねばならぬ。若し彼が一日三シリングでそれを賣るなら、丁度價値だけに賣るわけである。試みに彼を紡績工と假定せよ。彼が毎日六時間づゝ働けば、彼は毎日、三シリングだけの價値を綿花に附加する。そして此の毎日、彼が附加する價値は、彼が毎日受取る所の賃金(即ち彼れの勞働力の價格)と正に同額である。けれども、それでは資本家の取るべき、何等の剩餘價値(もしくば剩餘生産)がない事になる。それでは問題にならない。

資本家は勞働者の勞働力を買入れて、其の價値を支拂つた以上、有らゆる他の購買者と同じく其の買入れた商品を消費し又は使用する權利がある。機械を消費し又は使用するには、其の機械を運轉させる。人間の勞働力を消費し又は使用するには、其の人間を働かせる。故に資本家は、勞働者の勞働力の、一日分或は一週間分の價値を買取つた以上、其の勞働力を、丸一日、或は丸一週間、使用し又は働かせる權利がある。勿論、一日の勞働時間には制限があるのだが、其の事は後に委しく話す。差當りこゝでは、一つの決定點に諸君の注意を向けて貰ひたい。

勞働力の價値は、それを維持し再生産するに必要な勞働量に依つて決定されるのだが、其の勞働力の使用は、只勞働者の精力と體力とに依つてのみ制限される。勞働力の一日(もしくば一週間)の價値と、勞働力の一日(もしくば一週間)の働きとは全く別物である。それは丁度、馬の飼料と、其の馬が主人を乘せて走り得る時間とが、全く別物であるのと同じ事である。勞働者の勞働力の價値を限定する所の勞働量は、決して、其勞働力が果し得る所の勞働量を制限するものではない。かの紡績工の例を取つて見よ。前に云つた通り、彼れの勞働力を日々再生産する爲に、彼は日々三シリングの價値を生産せねばならぬ。それには日々六時間働けば宜しい。けれども彼はそれ故に、一日十時間、或は十二時間、或はそれ以上働く事が出來ないわけではない。そして資本家は、其紡績工の勞働力の、一日分(もしくば一週間分)の價値を支拂つてゐるのだから、其の勞働力を丸一日(もしくば丸一週間)使用する權利を持つてゐる。だから資本家は、毎日紡績工

を十二時間も働かせる事になる。そこで紡績工は、自分の賃金（即ち自分の勞働力の價値）を償ふ爲の六時間の外、更に六時間働く事になる。私はそれを『剩餘勞働』の時間と名づける。其の剩餘勞働が實體化したのが、即ち『剩餘價値』であり、『剩餘產物』である。

そこでかの紡績工が、毎日六時間の働きで三シリングの價値『即ち自分の賃金に相當する價値』を綿花に附加するとすれば、十二時間の働きでは六シリングの價値を綿花に附加し、從つてそれだけ剩餘の綿絲を產出するわけである。然るに彼は自分の勞働力を資本家に賣つてゐるのだから、彼が作りだした全價値（もしくは全產物）は、彼れの勞働力の一時的所有者たる資本家の手に屬する。だから資本家は三シリングを前拂じて六シリングの價値を得るのである。即ち、六時間の勞働の結晶した價値を前拂して、其の代りに、十二時間の勞働の結晶した價値を受取るのである。これと同じ遣り口を毎日繰返して、資本家は毎日三シリング先拂しては毎日六シリングを取る。そして其の半分は更に賃金として拂ひだされるが、殘る半分は全くの『剩餘價値』となるのである。資本と勞働との間に於ける此の交換の遣り口が、即ち資本家的生產（賃金制度）の依つてたつ基礎である。そして其の結果は絶えず、勞働者を勞働者として、資本家を資本家として再生產する事になる。

所で剩餘價値の率は（他の總ての事情が同一であれば）一日の勞働時間の中、勞働力の價値を再生產するに必要な部分と、資本家の爲に行はれる剩餘時間（即ち剩餘勞働）との比例に依つて決せられる。換言すれば、勞働者が自分の勞働力の價値を再生產する（即ち自分の賃金を償ふ）だけの勞働限度を越えて、それ以上に勞働時間が延長される其の割合に依つて決定される。

（四）勞働の價値

我々はこゝで『勞働の價値、又は價格』といふ言葉に立戻つて考へる。

前に云つた通り、勞働の價値（又は價格）とは、實は、勞働力の價値を、それの維持に必要なる商品の價値で計つたものに過ぎない。けれども、勞働者は自分の勞働を果した後に賃金を受取るのだから、そして又、勞働者は、自分が現に自分の勞働を資本家に與へる事を知つてゐるのだ

から、彼れの勞働力の價値（又は價格）が、彼に取つては必然的に勞働その者價格又は（價値）と見える事になる。彼れの勞働力の價格が三シリングであるとして、そして彼が十二時間働くとすれば、彼は必然的に其の三シリングを十二時間の勞働の價値（又は價格）と考へる。けれども實際には、三シリングは六時間の勞働の實體化であるから、十二時間の勞働の實體化は六シリングになる筈である。此の事實から二つの結果が生ずる。

第一。勞働力の價値（又は價格）が、勞働その者の價格（又は價値）といふ外觀を呈する。嚴密に云へば、勞働の價値とか價格とかいふのは無意味の言葉であるけれども。

第二、勞働者の一日の勞働の一部分だけが報酬を支拂はれ、他の部分は支拂はれてゐないのに、そして又、其の不拂勞働、若しくば剩餘勞働が、即ち資本家の取る剩餘價値（即ち利潤）の源であるのに、全體の勞働が支拂勞働であるかのように見える。

此の虛僞な外觀が、賃金勞働を歴史上の他の勞働形態（奴隷や農奴）から區別する。賃金制度の基礎の上に立てば、不拂勞働も支拂勞働のように見える。然るに奴隷に在つては其の勞働の支拂はれた部分すら不拂であるように見える。云ふまでもなく、奴隷も働く爲には生きて居らねばならぬ。從つて奴隷の勞働時間の一部分は、自分を維持する爲の價値に充てられる。けれども、奴隷と主人との間には何等の取引がなく、何等の賣買が行はれてゐないから、奴隷の勞働は總て無代であるように見える。

次に農奴（つい先頃まで東歐の全部に存してゐた農奴）について考へて見よ。此の農奴が、例へば三日間、自分の農地で働き、そして次の三日間、領主の土地で强制的の無代勞働をやるとせよ。その場合には、勞働の支拂はれる部分と、支拂はれない部分とが、目に見えて區別され、時間と空間とに於いて區別されてゐる。そこでブルジョアの自由主義者等は、封建的の領主に對して、只で人を働かせるなんて怪しからん事だと云つて、盛んに道德的義憤を發した。

然し實際の上から見て、人が一週間の中で三日間、自分の土地で自分の爲に働き、そして殘る三日間、領主の土地で只働くのと、それから工場又は職場で、毎日六時間だけ自分の爲に働き、次の六時間だけ雇主の爲に働くのと、同じ事ではないか。只だ後の場合には、支拂勞働と不拂勞

働とが不可分的に交りあつて居り、そして契約といふ形と週末拂の方法との爲、取引全部の性質が全く蔽ひ隱されてゐるだけの事である。一方では無代勞働が任意に提供されると見え、一方ではそれが强制的であると見える。只それだけの違ひだ。

以下『勞働の價値』といふ言葉を用いる場合は、『勞働力の價値』に對する俗用語としてのみ用いる事にする。

（五）利潤の得られる道

假りに一時間の平均勞働が六ペンス（半シリング）の價値に實現され、十二時間の平均勞働が六シリングに實現されるとせよ。又その勞働の價値が三シリング（即ち六時間の勞働の產物）だと假定せよ。そうすれば或る商品に消費された原料や、機械や、其他の物に廿四時間の勞働が實現されてあるとした時、其の價値は十二シリングになる筈である。そして又、資本家に雇はれた勞働者が、それらの生產要具（原料や機械など）の上に十二時間の勞働を加へたとする時、其の十二時間は更に六シリングの價値に實現される筈である。故に其の生產物の總價値は三十六時間の勞働の實現となり、即ち十八シリングになる筈である。然るに勞働の價値（即ち勞働者に支拂はれる賃金）は只つた三シリングであるのだから、其の商品の價値に實現された六時間の剩餘勞働に對しては、何等の代償も資本家から支拂はれてゐない。そこで資本家は其の商品を十八シリングで價値どほりに賣つて、三シリングだけの價値が浮いて來る事になる。此の三シリングが即ち資本家の剩餘價値（即ち利潤）になるのである。斯くて資本家は、商品を價値以上の價格で賣るのでなく、それを眞實の價値で賣つて、それで三シリングの利潤を得るのである。

商品の價値は、それに含まれた勞働の總量に依つて決定される。けれども、其の勞働總量の一部分は、賃金の形で代償を支拂つた價値の中に實現され、他の一部分は何等の代償をも支拂はない價値の中に實現される。故に、商品に含まれた勞働の一部分は支拂勞働であり、他の一部分は不拂勞働である。そこで商品を、それに費された勞働總量の結晶物として、價値どほりに賣れば、資本家は必然的に利潤を得る事になる。彼は代償を支拂つた物を賣るばかりでなく、少しも

元の掛らない物をも賣るのである。（尤も、勞働者に取つては、そこにも勞働の元が掛つてゐるのだが。）だから資本家に取つての商品の元價と、それの眞實の元價とは、別々の物である。そこで私は繰返して云ふ。普通の平均の利潤は、商品を價値以上に賣るのでなく、其の眞實の價値で賣る事に依つて得られるものである。

（六）剰餘價値の分割

『剰餘價値』、即ち商品の總價値の中で、勞働者の剰餘勞働（不拂勞働）が實現されてゐる其の部分、それを私は『利潤』と名づける。然し其の利潤の全部が勞働者を雇ふ資本家のポケットにはいるのではない。土地の獨占權が地主をして其の剰餘價値の一部を地代の名で取らしめる。其の土地が農業や建築や鐵道に用いられようとも、或は其の他の生産上の目的に用いられようとも構はない。又一方には、勞働機關の所有權が雇主たる資本家（即ち企業者）をして、剰餘價値を産出せしめる（即ち若干の不拂勞働を取得せしめる）といふ其の事實が、その勞働機關の全部もしくば一部を雇主たる資本家に貸してゐる人（早く云へば金貸し資本家）をして、剰餘價値の一部を利子といふ名目で請求させる。そこで雇主たる資本家に殘るのは、産業利潤もしくば商業利潤と呼ばれる部分だけになる。

如何なる法則に依つて、剰餘價値の總額が此の三種の人々の間に分割されるかといふ事は、今我々がこゝで論じてゐる問題とは全く關係がない。只これだけの事は、前に述べた所から結論される。

地代、利子、及び産業利潤は、商品の剰餘價値（即ち商品に含まれた不拂勞働）の諸部分に對する、それ〴〵の名稱に過ぎない。そしていづれも皆な等しく、此の源から、只だ此の源のみから、派出するものである。三者は決して土地その者からも、資本その者からも派出されるのではない。只だ土地と資本が其の所有者をして、企業者（即ち雇主たる資本家）の勞働者から搾り取る剰餘價値に對し、それ〴〵の分前にあづからせるのである。勞働者自身に取つては、其の剰餘價値（即ち自分の剰餘勞働もしくば不拂勞働の結果）が全部雇主たる資本家に取られようとも、

或は雇主が其の幾分を地代および利子の名目で第三者に分つ事を餘儀なくされようとも、それは大した問題ではない。若し雇主が自分の持つてゐる資本だけを使ひ、そして又自分が地主であるとすれば、全部の剰餘價値が其の一人のポケットにはいる筈である。

そこで假りに資本家の取りだす總利潤が百ポンドとすれば、我々はそれを獨立の金額として『利潤の額』と呼ぶ。けれども、放下された資本に對する其の百ポンドの割合を計算する場合には、我々はそれを相對的の額として『利潤の率』と呼ぶ。そして此の利潤率は明かに二樣の方法で言ひ現はされ得る。

假りに賃金として放下された資本が百ポンドであるとせよ。そして其の剰餘價値も百ポンドであるとせよ。そうすれば、勞働時間の半分が不拂勞働である事になる。そこで此の利潤を賃金に放下された資本で計るとすれば、我々は其の利潤率を百プロセントだと云ふ。なぜと云ふに放下された價値は百であり、收得された價値は二百であるのだから。

然るに、それと異り、若し我々が、賃金に放下された資本ばかりを考へないで、放下された總資本（例へば五百ポンド、その中四百ポンドは原料、機械、其他の價値を代表するとして）其の總資本を考へるとすれば、其の利潤率は僅かに二十プロセントになる。なぜと云ふに、百ポンドの利潤は、放下された總資本の五分の一にしか當らないから。

右の二方法の中、第一の利潤率表現法が、支拂勞働と不拂勞働の眞實の比例（即ち勞働搾取の眞實の程度）を示すものである。第二の方法は、普通に行はれてゐるもので、或る目的の爲には確に適當なものである。殊に、資本家が勞働者から只で勞働を搾り取る其の度合を隱す爲には、甚だ好都合なものである。

以下、私の話の中に、『利潤』といふ言葉を使ふ場合には、資本家が搾り取る剰餘價値の總額を意味する事とし、その剰餘價値が種々の人に分割される事については、少しも頓着しない事にする。又『利潤率』といふ言葉を使ふ場合には、私はいつでも、賃金に放下された資本の價値で利潤を計る事にする。（譯註。此の意味での利潤率の事を、マルクスは剰餘價値率とも云つてゐる。）

（七）利潤と賃金と價格との關係

商品の價値の中から、其の商品に用いられた原料その他の生産機關の價値を差引けば、（即ち其の商品に含まれてゐる過去の勞働の價値を差引けば）跡に殘る價値は即ち最近に使用された勞働者の附加した勞働量になる。そこで若し其の勞働者が毎日十二時間働き、そして十二時間の平均勞働が六シリングだけの金に結晶されるものとすれば、其の六シリングだけが勞働者の作りだす唯一の價値である。そして此の價値こそ、勞働者と資本家とがそれ〴〵の分前を取出し得る、唯一の源である。即ちそれが賃金と利潤とに分配される、唯一の價値である。其の分配される割合は如何樣に變らうとも、其の價値自身には何の變りもない事は明白である。若し一人の勞働者の代りに全國の總ての勞働者を置きかへ、一日の代りに何千萬日を置きかへても、道理には何の變りもない。

斯樣に、資本家と勞働者が極つた價値（即ち勞働者の總勞働量に依つて定められる價値）を分配するのだから、一方が餘計に取れば、それだけ一方の取分は少くなる筈である。凡そ或る分量が二分される時、一方は他方の減少と反比例して增大する。だから賃金が變化すれば、利潤はそれと反對の方向に變化する。賃金が下れば利潤は上る。賃金が上れば利潤は下る。若し勞働者が、前に擧げた例の通り、三シリング（自分の作りだした價値の半分だけ）を取るとすれば、即ち、（彼れの一日の勞働が、半分は支拂勞働、半分は不拂勞働であるとすれば）利潤率は百プロセントになる。なぜと云ふに、勞働者が三シリング取るのに對し、資本家も矢張り三シリング取るのだから。若し又、勞働者が二シリングしか取らないとすれば、（即ち一日の三分の一しか自分の爲に働かないとすれば）資本家は四シリング取るのだから、其の利潤率は二百プロセントになる。若し又、勞働者が四シリング取り、資本家が二シリングしか取らないとすれば、其の利潤率は五十プロセントに下るけれども、そういふ變化は幾らあつても、商品の價値には影響しない。

故に賃金の一般騰貴は一般利潤率の低下とはなるが、商品の價値には影響しない。けれども、商品の價値（窮極に於いて市場價格を規定する所の商品の價値）は只だ全く其の商品に固着され

た總勞働量に依つて決定されるものであつて、其の勞働量が支拂勞働と不拂勞働とに分割される其の割合に依つて動かされるものでないとは云ふものゝ、それから推論して、例へば十二時間内に生産された或る一種の商品、又は數種の商品の價値が、いつでも不變だと云ふわけには行かない。一定の勞働時間内に（即ち一定の勞働量で）生産される商品の數量は、其の使用された勞働の生産力に依るのであつて、その延長に依るのではない。例へば、紡績勞働の生産力の或る程度を以てすれば、十二時間の一勞働日で十二ポンドの糸を生産する事が出來るけれども、それより低い程度の生産力を以てすれば、僅かに二ポンドしか出來ない。そうすると、若し十二時間の平均勞働が六シリングの價値に實現されるとすれば、前の場合では十二ポンドの糸が六シリングに價し、後の場合では二ポンドの糸が同じく六シリングに價する事になる。從つて一ポンドの糸が前の場合では六ペンス（即ち半シリング）、後の場合では三シリングに價する事になる。斯樣に、價格の差異は、使用された勞働の生産力の差異から生ずる。大なる生産力の下では、一時間の勞働が一ポンドの糸に實現され、小なる生産力の下では、六時間の勞働が一ポンドの糸に實現される。一方の場合には、賃金は比較的に高く、利潤率は低いが、一ポンドの糸の價格は六ペンであり、他方には賃金は安く、利潤率は高いが、糸の價格は三シリングである。斯樣な事になるのは、糸の價格がそれに費された勞働の總量に依つて規定され、其の總量が支拂勞働と不拂勞働とに分割される割合に關係を持たないからである。

前に私は、高價な勞働が安い商品を生産し、安價な勞働が高い商品を生産し得ると云つたが、其矛盾らしい外觀が右の説明に依つて、除去された。つまり此の言ひ方は、商品の價値がそれに費された勞働量に依つて規定される、及び其の勞働量が又その勞働の生産力をたよりにする、從つて勞働の生産力の有らゆる變化と共に變化するといふ、一般法則を示したものに過ぎない。

（八）賃金値上、及び値下反抗運動

次に我々は、賃金の値上が企てられ、及び其の引下が抵抗される、主要の場合を考へて見る。

（一）前に述べた通り、勞働力の價値（通俗の言葉では勞働の價値）は、生活必要品の價値、

或はそれを生産するに要する勞働量に依つて決定される。然らば或國に於て勞働者の生活必要品の一日平均の價値が六時間の勞働（金にして三シリング）を代表するとすれば、其の勞働者は自分の生活に對する代償を生産する爲に、日々六時間働けばよい筈である。然るに一日の勞働時間が十二時間であつて、資本家は三シリングの賃金で其の勞働の價値を拂ふとすれば、半日分は正に不拂勞働であつて、利潤率は百プロセントに上ることになる。所が、今假りに、生産力が減少した結果として、例へば農産物の同一分量を生産する爲に、以前より多くの勞働を要する事になり、從つて生活必要品の一日の平均が三シリングから四シリングに上つたとせよ。その場合、勞働の價値は三分の一だけ高くなる。そして勞働者は以前と同じ程度の生活に對する代償を生産する爲には、八時間働かねばならぬ事になる。そこで剩餘勞働は六時間から四時間に減少し、利潤率は百プロセントから五十プロセントに減少する。然し其の時、勞働者が賃金の値上を要求するのは、自分の勞働の價値の增加しただけを要求するのであつて、それは丁度、有らゆる他の商品の賣手が、其の商品の元値の增加した時、其の增加した價値を取らうとするのと同じである。だから若し賃金が增加しないか、或は思ふほど增加しないで、生活必要品の價値の增加を償ふに足りない場合には、勞働の價格は價値以下に下り、勞働者の生活程度は下落する事になる。

けれども、それと反對の方向の變化も起り得る。勞働の生産力が增加した爲、從前通りの生活必要品の一日の平均が、三シリングから二シリングに下る事もある。即ち生活必要品の一日分の價値に對する代償を生産する爲に、以前は六時間を要したのが今は四時間で足りるといふ事もある。そうすれば勞働者は以前に三シリングで買つただけの生活品を今は二シリングで買ふ事が出來る。勞働の價値は下落したのだが、其の減少した價値で矢張り以前と同じだけの商品を求める事が出來る。そこで利潤は三シリングから四シリングに上り、利潤率は百プロセントから二百プロセントに上る。勞働者の生活程度は（絶對的に見れば）以前と同じだが、其の賃金は資本家の利潤と比較して（相對的に見れば）下落してゐる。又その社會的地位は、資本家の高まつた地位と比較して、相對的に下落してゐる。その時、勞働者が其の相對的賃金の下落に反抗するとすれば、それは自分の勞働の生産力の增加に對して、幾らかの分前を得ようとするに過ぎない。そし

て以前と同じだけの相對的地位（即ち資本家の高まつた地位との比較上、相當高まつた自分の地位）を維持しようとするに過ぎない。英國で穀物條例の廢止された後、――其の穀物條例反對運動の最中には、あれほど嚴肅な誓約をしたのに、無殘にも其の誓約に背いて――工場主等は一般に十プロセントだけ賃金を引下げた。それに對する勞働者の反抗は、最初は抑へつけられたけれども、種々なる事情の結果として、後に其の失はれた十プロセントを回復した。此の事實は右の說明の例證とするに足る。（註。穀物條例とは、地主の利益を保護する爲、穀物の輸入に關稅を課して、穀物の價を高くする法律であつたが、工業資本家等は自分達の利益の爲に、即ち勞働者の賃金を安くする爲に、それに反對し、勞働者の生活を助ける爲め穀物の價を安くせねばならぬと論じたのであつた。これが保主黨貴族に對する、ブルジョア自由黨の僞善な主張であつた）

（二）生活必要品の價値、從つて勞働の價値は、元ごほりでありながら、貨幣の價値に變化が起つた爲、其の必要品の貨幣價格に變化を生ずる場合がある。

從來よりも豐富な鑛山の發見・及び其の他の事情の爲、例へば二オンスの金が、從來一オンスの金を生產しただけの勞働で生產されるといふ場合がある。すると金の價値は半分に減ずる。そして總ての商品の價値が、以前の貨幣價値の二倍で表現される。從つて勞働の價値も其の通りである。即ち、十二時間の勞働は、以前六シリングで表現されてゐたが今は十二シリングで表現される。その時、勞働者の賃金が若し元ごほり三シリングであるなら、彼れの勞働の貨幣價格は其の價値の半分にしか當らないわけで、從つて彼れの生活程度は恐らく低下する事になる。

若し又、その時、賃金が上るとして、其の上り方が金の價値の下落と比例しないならば大なり小なり右と同じ事が起つて來る。凡そ斯ういふ場合には、勞働の生產力にも、其の需要共給にも、其の價値にも、何等の變化がない。變化したのは、只だ其の價値に對する貨幣の名稱ばかりである。それで其の場合、勞働者が相當の（金の下落に比例する）賃金增加を要求してはならぬと云ふならば、それは勞働者に向かつて、實物の支拂でなく、名目だけの支拂で滿足せよと云ふのと同じである。然るに總ての過去の歷史が證明する所に依れば、そういふ風に貨幣の下落が起つた時、資本家はいつでも素ばしこく其の好機會を捕へて、勞働者を胡麻化してゐる。そして大多數

の經濟學者の證言する所を見ると、金鑛の新發見、銀鑛探掘法の改善、及び水銀の廉價の共給の結果として、今や金銀の價値は再び下落してゐる。歐洲大陸に於いて、賃金値上の運動が一般的に、各地とも同時に起つてゐるのは、それで說明が出來る。

（三）以上の說明には、一勞働日（即ち一日の勞働時間）に一定の限度があるものと假定して置いた。けれども、勞働日（即ち勞働時間）は、それ自身として、不變の限度を持つものではない。資本家は常にそれを、生理的に可能なる最長限度まで延ばさうとする傾向を持つてゐる。なぜと云ふに、それを延長すればするほど、剩餘勞働が（從つてそれから生ずる利潤が）增大するから。斯くて資本は、勞働時間を延長する事に成功すればするだけ、それだけ多く他人の勞働を取りこみ得るのである。

十七世紀の間、及び十八世紀に入つても其の初めの三分の二の間は、十時間勞働が英國に於ける普通の勞働時間であつた。然るに反ジヤコバン戰爭――それは實際、英國の貴族が勞働階級に仕向けた戰爭であるが――其の戰爭の間に於いて、資本は大得意の全盛時代に達し、勞働時間を十時間から十二時間、十四時間、十八時間まで延長させた。マルサスといふ學者は、決して涙もろい感傷家ではないのだが、それが一八一五年に出したパンフレットの中に、『若しこんな事が永く續くなら、國民の生命は根本から破壞されるだらう』と云つてゐる。又、一七六五年ごろ、卽ち新發明の機械が一般に應用された時から數年前に、公然勞働階級の敵と名乘つてゐる或る匿名の著述家は、勞働時間の限界を擴張する事の必要を切言してゐる。そして彼は其の爲の一手段として、勞役場を設ける事を提案し、其の勞役場は『恐怖の家』でなければならぬと云つてゐる。所が、其の『恐怖の家』の勞働時間を、彼はどれほど長く指定してゐるかと云ふに、十二時間である。然るに其の十二時間は、一八三二年に於いて、資本家や經濟學者や大臣連が、十二歲以下の小兒に對する現行の勞働時間と云ふばかりでなく、是非とも必要な勞働時間だと認定した所のものである。（昔の殘酷な學者が思ひ切つて主張した十二時間勞働はまだ〳〵らくなもので、後にはそれが小兒の當然な勞働時間と認定されたのだから、資本家階級が出來るだけ勞働時間を延長させようと努力する傾向が、これで明白に分るわけである。）

勞働者は自分の勞働力を賣る事に依つて――現制度の下ではそうするより外はないのだが――彼は其の勞働力の消費方を資本家に引渡す。但しそれには相當の限度がある。勞働者が勞働力を賣るのは、(其の自然の消耗は別として)其の勞働力を維持する爲であつて、それを破壞する爲ではない。だから彼が一日もしくは一週間の價値で勞働力を賣る時、それを二日分若しくば二週間分、消耗させないと云ふ事だけは、初めから極まつてゐる筈である。假りに價一千ポンドの機械を例に取つて見よ。それが十年間に使用し盡されるとすれば、それで生産した商品の價値に對して、年々〳〵百ポンドを附加するわけである。若し又それが五年間に使用し盡されるとすれば、年々二百ポンドを附加するわけで、それの一年間の消耗分の價値はそれの使用し盡される速度と反比例するものである。所が、そこに勞働者と機械との區別がある。機械は其の使用され方と精密に同じ比例を以て消耗するわけではない。然るに人間は之に反し、仕事の分量の增加した其の數字よりも、モツト多い割合で衰弱する。

故に勞働者が、以前の相當な範圍にまで勞働時間を短縮しようとするのは――或は又、標準勞働時間の法律的規定を强制する事の出來ない場合に、賃金の引上(それは彼等がコキ使はれる剩餘時間に比例するだけでなく、更にそれ以上の比例での賃金の引上)を以て過重の勞働を防止しようとするのは――實に彼等が自己および自己の同族に對する義務を遂行するのである。(勞働時間の短縮を要求し、若しくば延長時間に對する割合以上の增賃を要求する事は、實に勞働者が自分と自分の階級との滅亡を防ぐ爲の義務である。)彼等は只それに依つて、資本の壓制的暴虐に制限を加へるのである。そもそも時間は人間の發達する餘地である。人間が一生涯、眠るとか食ふとかいふ、單なる生理的の中休み以外、總ての時間を資本家の爲に働き、少しも自分の勝手になる時間を持たぬといふ事は、實に牛馬にも劣つたわけである。そういふ人間は、他人の富を生産する爲の單なる機械であつて、其の體は壞され、其の心は荒される。然るに近世産業の全歷史が示す所に依れば、資本が若し防遏を受けないならば、それは飽くまで暴虐に全勞働階級を切り從へて、此の極度の退化狀態に陷しいれようと努めるものである。

資本家は勞働時間を延長する事に依つて、ヨリ高き賃金を支拂ひながら、それでも勞働の價値

をヨリ低くする事が出來る。賃金の騰貴する割合が、勞働使役量の增大と、それが爲に引起される勞働力の急速な減退とに相應しない場合は、即ちそうなるのである。又こういふ場合もあり得る。例へば、世間の統計家が、ランカシヤア地方に於ける、職工の家族の平均賃金が上つたと云ふ。然るに其の時、彼等は忘れてゐる、今では其の家族の戸主たる男子が勞働するばかりでなく、其の妻と、恐らくば三四人の子供とが、資本の大車輪の輪の下に投げこまれてゐる事を。そして又、其の賃金の合計の總額が、其の家族から搾り取られる剩餘勞働の合計と相應してゐない事を。

工場法の適用されてゐる總ての産業部門には、勞働時間の或る制限が定められてゐるが其の場合に於いてすら、勞働價値の從來の標準を維持するだけの爲にでも、賃金の增加が必要となる事がある。勞働の强度（働き方の烈しさ）を增加すれば、人は一時間の中に、以前二時間で使つたと同じ程の、精力を使はせられるものである。此の事は、工場法の下に置かれてゐる諸事業に於いて、大機械の運轉速度を增進する事と、一人の勞働者が受持つ作業機械の數を增加する事とに依つて、既に或る程度まで實現されてゐる。若し勞働の强度（即ち一時間内に費さるゝ勞働量）の增加が、勞働時間の短縮と可なりの比例を保つならば、勞働者はそれでも得が行くのだが、若し其の限度が乘越されるならば、勞働者は一方に於いて得る所を他方に於いて失ふわけで、十時間勞働でも、以前の十二時間勞働と同じ程の惡結果を來す事になる。だから勞働者が、勞働の强度の高まるのに相應するだけの賃金の增加を要求して、資本のこういふ惡傾向を阻止するのは、實に只、自分の勞働の類癈と、自分の種屬（即ち一般勞働階級）の退化とに反抗するのである。

（四）諸君の知らるゝ通り、資本家的生産は、常に或る週期的の循環を成してゐる。（其理由は今こゝで說明を省略する。）即ち資本家的生産は靜穩狀態、活氣狀態、好景氣狀態、生産過剩狀態、恐慌狀態、沈滯狀態を經過するものである。そして市場に於ける商品の價格と利潤率とが、その諸局面に從つて、或は平均以下に沈み、或はそれ以上に上る。此の循環の全部を考察する時は、市場價格の一方のはみだしが他方のはみだしに依つて償はれる事が分る。そして又、其の循環の平均を取れば、商品の市場價格が其の價値に依つて規定される事が分る。所で市場價格の下落時期、及び恐慌沈滯時期の間、勞働者はよしんば全く其の業を失はないとしても、確に其の賃金を

下げられるに極まつてゐる。その時、勞働者がだまされまいとするには、そういふ市場價格の下落はあるにしても、果してどれだけの程度まで、それに比例して賃金を下げる必要があるかについて、大いに資本家と論爭せねばならぬ。又餘分な利潤の生ずる好景氣時代に、若し勞働者が賃金値上の爲に戰はなかつたとすれば（そして不景氣時代には賃金を下げられるとすれば）産業の一循環期を通じて計算する時、勞働者は平均賃金（即ち勞働の價値）すらも受取らない事になる。不景氣時代には必然的に賃金を下げられ、而も好景氣時代には其の償ひを求める事が出來ないなどゝ云ふのは、餘りに馬鹿々々しい沙汰である。

大體から見て、總ての商品の價値は、需要共給の絶えまなき變動から生ずる、市場價格の絶えまなき變動が、互に相殺する事に依つて、そこに初めて實現される。現制度の下に在つては、勞働は他の諸商品と同じ商品に過ぎない。だから勞働も、同じような變動を經て、其の價値に相應するだけの平均價格を取らねばならぬ。然るに、一方に於いては、勞働を商品として取扱ひながら、他方に於いては、商品の價値を規定する法則から勞働を除外しようとするのは、不都合千萬である。奴隷は永久的に定額の衣食を得てゐるが、賃金勞働者にはそれがない。だから勞働者は、或る場合に於ける賃金の下落を償ふだけの爲にでも、他の場合に於いて、賃金の値上を迫らねばならぬ。若し勞働者が、資本家の意志命令を永久の經濟的法則として受入れる事を甘んずるならば、彼は奴隷の持つだけの安全も持たないで、そして奴隷の持つだけの貧窮を持たねばならぬ事になる。

（五）右に述べた總ての場合に於いて、（それは百中九十九の場合であるのだが）、賃金値上の鬪爭は、それ以前の諸變化の跡にのみ生ずるものである事が分る。即ち生産額の變化勞働生産力の變化、勞働價値の變化、貨幣價値の變化、勞働使用の延長および激度の變化市場價格の變化などから生ずる必然的の産物である事、之を一言にすれば、資本の前以ての行動に對する勞働の反動である事が分る。そこで總てこれらの諸事情から獨立させて賃金値上の鬪爭を取扱ふ事、即ち賃金の變化のみを見て、其の變化を生ぜしめた他の諸變化を見落す事は、誤つた前提から出發して誤つた結論に到達するものである。

（九）資本と勞働との鬪爭

（一）前章に於いて、賃金引下に對する勞働者の定期的反抗、及び賃金引上の爲の定期的運動が、賃金制度から不可分のものである事、及びそれは勞働が商品と同一視されて居り、從つて一般價格の法則に支配されて居るといふ、其の事實から起るものである事を說いた。猶又、賃金の一般的騰貴は一般利潤率の下落を來すが、商品の平均價格（即ち其の價値）に影響するものでないといふ事をも、前章で說いた。そこで最後の問題は、資本と勞働との此の不斷の鬪爭に於いて、勞働が果してどこまで成功し得るかといふ事である。

私はそれに對し、大體論として斯樣に答へる。勞働も他の總ての商品と同じ事で、其の市場價格は、結局、其の價値に歸着する。故に有らゆる賃金の高低に係はらず、又勞働者が如何なる事をやるにせよ、彼は平均して自分の勞働の價値を受取るに過ぎない。そして其の勞働の價値とは即ち勞働力の價値であつて、勞働力の維持と再現とに要せられる生活資料の價値に依つて決定されるものであり、又その生活資料の價値は結局、それを生產するに要せられる勞働量に依つて決定されるものである。

けれども、勞働力の價値と、他の總ての商品の價値との間には、或る特別な差異點がある。勞働力の價値は二つの要素から成つてゐる。一は生理的のものであり、一は歷史的の（若しくば社會的の）ものである。勞働力の究極の限度はその生理的要素に依つて決定される。即ち勞働力を維持し再現する爲には（換言すれば、其の生理的存在を永續させる爲には）勞働階級は生活と蕃殖とに絕對不可缺の衣食住を受取らねばならぬ。故に、其の絕對不可缺の衣食住の價値が、勞働の價値の究極の限度である。然るに一面には、勞働時間の長さ、又、究極の（然し可なり融通のきく）境界線に依つて制限される。即ち其の究極の限度は、勞働者の體力に依つて定まる。若し彼れの精力の日々の消耗が或る程度を越えるならば、それは引續き繰返して行使され得なくなる。けれども、右云ふ通り此の制限には可なりの融通がきく。不健康な短命な勞働者を、幾代も幾代も急速に取りかへて續けて行けば、元氣な長命な勞働者の數代の繼續と同じように、當分

のあいだ勞働市場を維持する事が出來る。

此の單なる生理的要素の外に、勞働の價値はどこの國でも、傳統的の（仕來りの）生活標準に依つて決定される。其の仕來りの生活と云ふのは、單なる肉體的の生活でなく、人の育てあげられた社會的諸條件、生活上の習慣など）から生ずる、一定の慾望の滿足である。だからイギリスの生活標準をアイルランドの標準に引下げる事も出來るし、ドイツの百姓の生活標準をリヴオニアの百姓の標準に引下げる事も出來る。けれども、歴史的の傳統と社會的の習慣とは、此の點に於いて可なりの重要さを持つもので、現にイギリスの農業諸地方に於ける平均賃金は、其の地方々々が農奴狀態から脱出した當時の事情の良否に依つて今でも矢張り差異を呈してゐる。

勞働の價値の中にはいりこんでゐる此の歴史的（或は社會的）要素は、擴大する事も出來れば縮少する事も出來るし、又生理的限度以上に何も殘らぬほど、全く亡ぼし盡す事も出來る。

諸國に於ける標準賃金を比較し、又同じ國の諸時代に於けるそれを比較する時、勞働の價値その者は、――他の總ての商品の價値には變動のないものと假定しても、――それは決して固定したものでなく、可變的のものだといふ事が分る。又同じ比較に依つて、利潤の市場率と共に其の平均率が變化する事も分る。

然し、利潤に關しては、其の最低限度を決定する何等の法則もない。我々は利潤の低下し得る究極の限度を定める事が出來ない。何故に我々はそれを定め得ないか。それは我々が賃金の最低限度を定める事は出來るけれども、其の最高限度を定める事が出來ないからである。只だ我々の云ひ得る所は、勞働時間の限度が極まつてゐるなら、利潤の最高限度は賃金の生理的最低限度に相應するといふ事、及び賃金が極まつてゐるなら、利潤の最高限度は勞働者の體力の堪へ得る限りの、勞働時間の延長に相應するといふ事である。（勞働時間が極まつてゐれば、賃金を下げられるだけ下げた時、利潤が最高限度に達する。又賃金が極まつてゐれば、勞働時間を延ばされるだけ延ばした時、利潤が最高限度に達する。）故に利潤の最高限度は、賃金の生理的最低限度と、勞働時間の、生理的最高限度とに依つて決定される。但し此の利潤の最高率の二つの限度の間には、廣大な變化の可能がある。だから其の實際の程度の定まるのは、資本と勞働との間に於ける

不斷の鬪爭に依るより外はない。即ち資本家は絶えず賃金を生理的最低限度に引下げ、勞働時間を其の生理的最高限度に延長しようとするのに、勞働者は絶えず其の反對の方向に突き進んでゐる。

そこで問題は、鬪爭者双方の實力如何といふ事に歸着する。

(一) イギリスに於ける勞働時間の制限は、他の諸國に於けると同じく、立法上の干渉以外で決定された事がない。勿論そういふ法律の干渉は、勞働者の絶えざる壓迫が外部から働かないでは、決して起るものではない。けれども、兎にかく、勞働者と資本家との私的協定では、そういふ結果は得られないのであつた。こういふ政治行動が必要だといふ事は單なる經濟的行動では、資本が強味を持つてゐるといふ事を證明するものである。

勞働の價値の限度に關しては、其の實際の決定はいつでも需要共給の關係(即ち勞働に對する資本側の需要と、勞働者側に於ける勞働の供給)とに依るのである。植民地諸國に於いては、需要供給の法則は勞働者に有利である。だからアメリカ合衆國では、賃金の標準が比較的に高い。

資本はそこでも一生懸命に勞働を搾らうとする。けれども、賃金勞働者が絶えず獨立自營の農民に變ずるので、勞働市場が絶えず不足がちになるのを、ドウする事も出來ない。アメリカ人の大多數に取つては、賃金勞働者の地位は見習ひ期間に過ぎないので、晩かれ早かれ其の地位を去るに極まつてゐる。こういふ植民地の狀態を妨げる爲に、母國たるイギリス政府は、初め暫らくの間、植民地の土地に人爲的の高値を附し、それで以て賃金勞働者が餘り早く獨立の農民に變ずる事を防いだものであつた。

然しアメリカの事は姑く置き、資本が生産過程の全部を支配する舊文明國の事を考へて見る。例へば、イギリスで一八四九年から一八五九年まで農業賃金の騰貴した時はどうであつたか。農業資本家(勞働者を雇つて農業を經營する資本家)は小麥の價格を上げる事も、その市場價格を上げる事すらも、出來なかつた。彼等は其の反對に、價格の下落に服從せねばならなかつた。けれども彼等は此の十一年間に、有らゆる種類の機械を採用し、一層科學的の方法を用い、耕地の一部を牧場に變じ、農場を廣げて生産の仕掛を大にし、猶ほ其の他の諸方法に依り、勞働の生産力

を增加して勞働に對する需要を減じ、再び農民の數を過剩にした。これが舊開國に於いて、賃金の騰貴に對し、晩かれ早かれ資本が利す所の、反動の一般方法である。リカルドが旨く云つた通り、機械は絶えず勞働と競爭してゐるもので、勞働の價格が或る高さに達した時、初めて採用される場合が多い。然し機械の應用は、勞働の生產力を增加する多くの方法の一つに過ぎない。又、普通勞働者を過剩にする其の同じ發達が、一方に於いては熟練勞働を單純化し、そして其の價値を下げる。

此の同じ法則が更に他の形を以て現はれる。勞働の生產力の發達すると共に（賃金の比較的高率な場合ですら）、資本の集積が促進される。從つて斯ういふ考へをする人もある。資本の急激な集積は勞働に對する需要を增加するから、勞働者の利益になると。アダム・スミスも、近代產業のまだ幼稚な時代の人として、そう論じてゐる。其の同じ立場からして、現代の多くの學者等も、イギリスの資本が最近二十年間に、人口の增加に比べて遙に多大の發育をしてゐるのに、賃金がナゼもつと騰貴してゐないのかと驚いてゐる。然し實際は斯うである。資本の蓄積の進むと

同時に、資本の構成（組立）に累進的の變化が起る。即ち總資本の中、機械、原料、その他あらゆる生產機關から成り立つ部分（即ち固定資本）が、資本の他の部分（即ち、賃金に充てられる部分、勞働の買入に充てられる部分）に比べて累進的に增大する。

資本のこの二要素の割合が元は一對一であつたとすれば、產業の發達した今日では、五對一といふような事になつてゐる。假りに總資本六百圓の中、三百圓が機械、原料、其他に支出され、三百圓が賃金に支出されるとすれば、從來使用した勞働者數三百人を二倍して六百人を需要する爲には、總資本を二倍にすれば足りるわけである。然るに若し總資本六百圓の中、五百圓が機械原料、其他に支出され、僅かに百圓だけが賃金に支出されるとすれば、從來の勞働者三百人を二倍して六百人を需要する爲には、其の總資本を六百圓から三千六百圓に增加せねばならぬわけである。だから產業の發達する間に於いて、勞働に對する需要は決して資本の集積と並行するものではない。勞働に對する需要は矢張り增加するに相違ないけれども、資本の增加と比較して、絶えず其の增加の割合を減少するものである。

右の僅かな説明に依つて、これだけの事は明かになつた筈である。近代産業の發達その者は、勞働者に不利であつて、資本家に有利である所の、累進的傾向を持つてゐる。從つて又、資本家的生産の一般傾向は、賃金の平均標準を高めないで、それを下げるものである。卽ち勞働の價値を、大なり小なり其の最低限度に押しさげるものである。資本制度の傾向が斯樣なものであるこした時、勞働階級が資本の侵入に對して其の反抗をやめられるものかどうか。又、折々彼等の一時的改善の機會が生じた時、それを最善に利用する畫策を放棄し得るものかどうか。若し彼等がそれをやるとすれば、彼等は一樣に悉く救ふべからざる敗殘者に墮落するのである。前に述べた通り、賃金の標準に對する彼等の鬪爭は賃金制度の全體から分つことの出來ない附隨事件である。また百中の九十九まで、彼等の賃金値上の努力は、只だ當時の勞働の價値を維持する努力である。又彼等が勞働當時の價格を資本家と爭ふ事は、勞働を商品として賣らねばならぬといふ彼等の立場に固着した事柄である。然るに若し彼等が卑怯にも、日常の資本家との衝突に於いて讓歩するならば、彼等は正に何らの大運動をも起し得ざる無資格者となるのである。

然しながら、之と同時に、勞働階級は此の日常の鬪爭の究極の効果を過大視してはならない。卽ち日常の鬪爭について自惚すぎてはならない。彼等は結果と戰つてゐるのであつて、其の結果の原因と戰つてゐるのでないといふ事を忘れてはならない。彼は下り向の傾向を阻止してゐるのであつて、其の方向を變化させようとしてゐるのではないといふ事、又彼等は姑息の療治法を用いてゐるのであつて、病氣の根治を計つてゐるのでないといふ事を忘れてはならない。故に彼等は資本の飽くことなき進擊と、市場に於ける諸變化とから間斷なく生じて來る所の、此の避くべからざる小ぜりあひにのみ沒頭してはならない。彼等は現制度が、有らゆる悲慘を彼等の上に負はせてゐるにも係はらず、それと同時に、社會の經濟的改造に必要なる、物質的條件と、社會的形體とを產みだしつゝある事を理解せねばならない。彼等は『正當なる勞働に對する正當なる賃金』などゝいふ保守的なモットー（標語）の代りに、『賃金制度の廢止』といふ革命的の警句を其の旗の上に書きしるすべきである。

以上の長談義の後、私は左の三個條の斷案を提出して此の話を終る。

第一。賃金率の一般的騰貴は、一般利潤率の下落を來すものではあるが、大體から云つて、商品の價格に影響するものではない。

第二。資本家生產の一般的傾向は、賃金の平均標準を高めるものではなくて、それを低めるものである

第三。勞働組合は資本の進擊に對する抗爭の中心點として立派な働きをする。然し部分的に云へば、勞働組合は其の力の無分別な使用の爲に失敗する。そして一般的に云へば、勞働組合は現存制度の結果に對する小ぜりあひのみを事とする爲に失敗する。即ち、それと同時に現存制度を變更しようとせず、自己の團結力を勞働階級の最後の解放（即ち賃金制度の究極の廢止）の爲の槓杆として用いようとしない爲に失敗するのである。

——（終）——

297
313

譯者より

▲「價値と價格と利潤」は、マルクスが、一八六五年ロンドンに開かれた國際勞働者同盟（謂ゆる第一インタナショナル）の總會でやつた演說の筆記である。

▲私の譯し方は稍や自由譯で、あちこち省略した所もあり、又註釋を加へた所もある。原書の初の方の三分の一ばかりは、他の演說者に對する駁論になつてゐるから、そこは全部省略した。表題を「利潤の出處」と改めたのは、其の方が呼びよいと思つたからである。

▲此の書は「勞働と資本」と共に、否それにも增して、マルクスの經濟論の要領を簡單に理解する爲、最も適當な、そして最も正確な手引だと云はれてゐる。

▲此の書には河上肇君の譯がある。私の譯文中にも河上君の字句をそのまゝ借用した個所が少くない。

（一九二三年五月、堺生）

取次書籍目次

(1) 社會主義大意……堺　利彥（一〇）
(2) 勞働と資本……マルクス（一五）
(3) 社會主義と進化論……パンネコック（一五）
(4) 利潤の出處……マルクス（二一）
(5) 社會主義學說大要……堺　利彥（一三）
(6) ゴタ綱領批評……マルクス（二〇）
(7) パリ・コムミユンの話　堺　利彥（二〇）
(8) ロザの手紙……ルクセンブルク（一二）

資本主義のからくり……山川　均（二〇）
無產階級の過現未來……エンゲルス（一〇）
常識の社會主義……北原龍雄（一〇）
社會主義倫理學……カウツキー（一五〇）
唯物史觀解說……ゴルテル（二〇〇）
空想から科學へ……エンゲルス（一五〇）
ロシヤへ入る……荒畑寒村（二三〇）
マルクスの生涯及び學說……西　雅雄（一八〇）
帝國主義（資本主義最後の段階）……レーニン（二〇〇）
農村問題（資本主義展開期に於ける）……レーニン（一五〇）

東京麴町八丁目廿四
振替東京二四六二六
無產社

大正十二年六月七日印刷
大正十二年六月十日發行
大正十五年[illegible]月十日四版
（價二十錢）

東京市麹町區麹町八丁目二十番地
編輯發行人　堺　眞柄
東京市牛込區鶏卷町四百二十九番地
印刷所　稲葉印刷所

發行所　東京麹町八丁目廿番地
振替東京二四六二六番
無産社

終